

男性同性愛者のアイデンティティを再考する —アフィニティ・多様性・再帰性の視座から—

徐崢睿

上智大学大学院

概要：本研究は、中国の事例に焦点を当て、男性同性愛者のアイデンティティ形成の過程を再検討し、従来の同性愛アイデンティティ理論の限界と新たな概念化の可能性を探ることを目的とするものである。本稿では、従来の枠組みにとらわれない、同性愛アイデンティティ理解のための三つの新たな視座を提案する。第一に、「アフィニティ」をセクシュアル・アイデンティティの不可欠な構成要素として理論化することの意義と必要性を論じる。第二に、従来の「統合仮説」に代わる、より多元的かつ構成主義的なアプローチの必要性を主張する。最後に、本研究は、ゲイ男性のアイデンティティ形成という具体的文脈において、「統合仮説」の妥当性そのものを問い直し、固定的かつ普遍的なものとしてではなく、再帰的かつ文脈依存的なプロセスとしてアイデンティティを理解する重要性を強調する。社会構造の変容にともなって存在論的な不安が生じるなか、人々が統合的なアイデンティティを求める傾向が見られるが、本研究ではその傾向を批判的に捉えつつ、状況に応じて構成される再帰的なアイデンティティ概念の可能性についても論じた。

キーワード：男性同性愛者 セクシュアル・アイデンティティ アフィニティ 統合仮説

Rethinking the Sexual Identity of Gay Men —Perspectives of Affinity, Diversity, and Recursivity—

Zhengrui Xu

Graduate school of education Sophia University

Abstract: This study reexamines the formation of male homosexual identity by focusing on the case of gay men in China, aiming to explore both the limitations of traditional theories of homosexual identity and possibilities for new conceptualizations. In this paper, I propose three new modes of understanding homosexual identity that deviate from conventional frameworks. Firstly, I discuss the potential and necessity of conceptualizing "affinity" as an integral part of sexual identity. Additionally, I argue for the need for a pluralistic and constructivist approach that moves beyond the traditional "integration hypothesis" of homosexual identity formation. Finally, this study questions the validity of the "integration hypothesis" in the context of gay male identity formation and underscores the importance of understanding identity as recursive rather than fixed and universal. As societal structures shift, giving rise to ontological insecurity, there remains an inclination towards seeking a unified identity as a strategy to cope. This study discusses this inclination along with the potential for a recursive, context-dependent conception of identity.

Keywords: Gay Men, Sexual Identity, Affinity, Integration Hypothesis

1. はじめに

同性愛者のアイデンティティ形成に関する研究は、長らく固定的かつ統合的なアイデンティティを理想化する傾向にあった。特に Cass (1979, 1984) や Troiden (1989) による段階モデルは、同性愛者が葛藤を経ながらも最終的に統合された肯定的なアイデンティティへと至るプロセスを前提としてきた。しかし、島袋 (2023) が指摘するように、従来の同性愛者のアイデンティティ形成に関する研究においては、「同性愛者が葛藤や戸惑いを経ながらも最終的には同性愛という単一のアイデンティティ獲得に辿り着くことが自明視され」ており、その結果、多様なアイデンティティ形成のプロセスが十分に捉えられていない。この点を踏まえ、これまでの同性愛者に関する経験的研究を再検討し、単一のアイデンティティ獲得を前提とした理論を反省的に捉え直すことが求められている。

ポスト構造主義の広がりによって、アイデンティティを本質的・固定的なものと捉えず、その流動性・構成性・多元性に注目する研究が多くなっている（藤田 2015、島袋 2022a など）。ポスト構造主義パラダイムは、「セックス、ジェンダーといった概念をア・プリオリに設定することを否定し、ジェンダーは他者との差異化行為を通じて初めて産出されるものとみなす立場」（中西・堀 1997）である。このパラダイムはアイデンティティが社会的な規範や権力によって形作られ、常に再構築されるものとして捉え、固定的なカテゴリーにとらわれない流動的な視点を提供する。

こうした理論的發展にもかかわらず、多くの同性愛者アイデンティティ研究は、依然として統合的なアイデンティティを理想化する傾向があり、アイデンティティの多様なあり方や実践を十分に考慮していない。グローバル化と個人化が進行する現代社会において、同性愛者が直面する社会的状況や経験は多様化しており、これに対応したアイデンティティ理解が求められている（元山 2020）。

なお、従来の同性愛研究では男女を包括的に扱うことが多かったが、男性同性愛者と女性同性愛者は、社会において共通する困難に直面しつつも、そのアイデンティティ形成の過程や社会的相互作用には顕著な差異が認められる。とりわけ男性同性愛者は、グローバル化や個人化が進む現代社会において、伝統的な男性性に基づく社会的期待に直面しており、複雑なアイデンティティ形成を余儀なくされている。

こうした男性同性愛者のアイデンティティを理解する上での格好の事例となるのが、中国の男性同性愛者である。中国では、急速な経済発展やグローバル化の影響により、LGBTQ+に対する理解や価値観が変化している一方で、伝統的な家族観や社会的規範が依然として強く残っており、「グローバルとローカルのせめぎ合い」を経験している。同性愛者のアイデンティティに関する理論は、特に欧米において開発されてきたものが多く、そこではリベラルな個人主義や法的な権利の保障が前提とされていることが多い。しかし、中国では家族中心主義や政治的な管理体制といった、これらとは異なる社会的・文化的条件が男性同性愛者のアイデンティティ形成に影響を及ぼしている。こうしたことから、本研究では、中国の男性同性愛者の事例を取り上げ、従来の同性愛アイデンティティ理論の限界と新たな可能性を示すことを目的とする。

本稿の構成は以下の通りである。第2節では、Cass や Troiden などの理論とその限界を整理し、中国における先行研究の展開を批判的に検討する。第3節では、同性愛アイデンティティを固定的・内面的本質としてではなく、社会的実践や関係性の中で再帰的に構成されるものとして捉える理論的枠組みを提示する。第4節では、「アフィニティ」「多様性」「再帰性」という三つの視点を導入し、男性同性愛者のアイデンティティ形

成をめぐる新たな理解の可能性を提案する。最後に、第5節では本研究の理論的貢献と今後の課題を整理する。

2. 先行研究

ゲイ解放運動の広がりによって、近代の長い歴史の中で異性愛者によって「語られる」同性愛から、自ら「語る」ゲイとしてのアイデンティティへと変化していった。ゲイという集団的なアイデンティティの構築を通して、奪われてきた尊厳や権利を取り戻しようとした(元山 2020)。これにより、ゲイ解放運動と結びついたゲイ・スタディーズの蓄積がなされ、研究主体としての同性愛を立ち上げ、その可視化を図り、異性愛の自然性や優位性に異議を唱えた。その中で、「統合仮説」を基盤とする同性愛者のアイデンティティ形成の研究が数多く登場するようになっている。統合された肯定的なアイデンティティを形成することが精神的な問題の予防や、自尊心の向上に寄与することが指摘されている(葛西 2014)。

「統合仮説」を基盤としている同性愛アイデンティティ理論の研究は、しばしば段階モデルを使用し、同性愛アイデンティティの発達過程を記述する傾向がある。例えば、Cass (1979, 1984) や Troiden (1989) がそれぞれ同性愛アイデンティティ受容の段階モデルを提唱している。これらのモデルは、同性愛者が自分の性的指向とアイデンティティの調和を図り、アイデンティティの統合に至るプロセスを記述している。これらのモデルには、アイデンティティの過程におけるいくつかの段階があり、それぞれには次の段階に進むために達成すべき課題を規定している。Cass (1979) は6段階のモデル(①アイデンティティの混乱(identity confusion)、②アイデンティティの比較(identity comparison)、③アイデンティティの許容(identity tolerance)、④アイデンティティの受容(identity acceptance)、⑤アイデンティティの誇り(identity pride)、⑥アイデンティティの統合(identity synthesis))を提案し、線形的な発達プロセスとして説明している。Cassによれば、各段階は順序どおり進行し、スキップは不可能であり、全プロセスを完了できない場合、アイデンティティの拡散が生じるとされる。しかし後にCass (1984) は、質問紙調査の結果からアイデンティティの混乱と比較、許容と統合の間には明確な違いがないことを指摘し、4段階モデルの可能性も示唆している。

4段階モデルを明確に描いたのはTroiden (1989)である。Troidenは、①鋭敏化(sensitization)、②アイデンティティの混乱(identity confusion)、③アイデンティティの受容(identity assumption)、④コミットメント(commitment)の4段階のモデルを提示した。Cassの直線的なモデルとは異なり、アイデンティティ形成は「水平方向の螺旋」に例えられ、段階の進行は前後、上下に行われ、段階の特徴は個人により重複・再現され得ると考えている(Troiden 1989)。Troidenは、同性愛者のアイデンティティは固定的・絶対的に決定されるものではなく、常に変化し続けるものであると主張している。しかし、「同性愛者のアイデンティティ形成は、生涯に渡る『なりゆき』の過程であり、『努力はするが決して到達しない』過程である。このため、同性愛者のアイデンティティと役割へのコミットメントは程度の問題(Troiden 1989)」だと述べたのは、結局のところ、Cassと同じく到達すべき統合した安定なアイデンティティを想定しており、「統合仮説」を理論の基盤としていることは否めない。

CassとTroidenのモデルを参考または援用し、日本や中国の同性愛者のアイデンティティ形成を説明しようと試みた研究は多く存在する。これらの研究は、CassとTroidenと同様に、アイデンティティの統合を目標とする想定を共有している。日本の研究動向

については島袋（2023）が整理しており、男子大学生の同性愛アイデンティティ形成過程をまとめた堀田（1998）、同性愛者の日常的な体験を調査した石丸（2003、2005）、カウンセラーの立場から同性愛者のセクシュアリティ受容のプロセスを描き出した宮腰（2012、2013）などを紹介している。

一方で、中国の同性愛者のアイデンティティ形成に関する研究も散見される。例えば、王中傑ら（2012）、李炳南ら（2021）、蒋思毅ら（2022）は事例研究で男性同性愛者の各形成段階の特徴をまとめている。計量的に社会規範が男性同性愛者のアイデンティティ形成に与える影響を探った研究も存在する（白璐 2013、李放 2018）。これらの研究は、いずれも同性愛者の自己認識（同性愛という性的指向）と社会規範（ヘテロノーマティビティ）との統合を図ろうと試みた。

しかし、これらの同性愛者のアイデンティティ形成研究は統合された一枚岩の同性愛者アイデンティティを理想化しており、その内部に存在する差異や多様性を十分に捉えきれていない点も問題視されている。Duggan（2002）が提唱するホモノーマティビティの概念は、LGBT コミュニティ内における格差を浮き彫りにし、都市的で中流階級的な消費主義的同性愛文化に適合できない人々を排除し、新たな抑圧の秩序を生み出している可能性を暴いている。こうした批判を踏まえ、1990 年代以降、欧米ではクィア理論やポスト構造主義的議論の展開により、アイデンティティの構成性・流動性を強調する新たな視座が広まった。

クィア理論は、このような固定されたアイデンティティに対する批判的視点を提供する。クィア理論は、従来のジェンダー・セクシュアリティに関する二項対立的な認識、すなわち「同性愛者対異性愛者」という構造を問い直し、セクシュアル・アイデンティティが社会的・文化的文脈の中で流動的に変化するものであることを強調する。クィアという概念は、いわば本質なきアイデンティティ、脱アイデンティティ的アイデンティティとして位置付けられる。その特性は、既存の規範における境界を曖昧にし、固定されたラベルやカテゴライズに対抗することにある。この意味で、クィアは常に不確定であり、明確な境界線を持たないことを理想とする。クィア理論はポスト構造主義の成果に大きく依存しており、その核心にはバトラー（1990）が提唱した「パフォーマティビティ」の概念がある。パフォーマティビティ概念は、アイデンティティが必然的に動的かつ流動的であることを強調する。これにより、同性愛者のアイデンティティも社会的文脈に応じて常に再構築されるものであり、その多様性と変動性を強調することが必要とされる。また、フーコー（1978）は、アイデンティティ形成がいかに社会的な権力と知識の関係の中で構築されているかを明らかにした。彼によれば、いかなる発達の枠組みも特定の歴史的構築の中に組み込まれており、それは単なる心理的または個人的な発達プロセスではなく、社会の権力構造に浸透した文化的文脈によって規定されている。フーコーの議論は、アイデンティティ形成がその時代特有の権力関係の中で生じるものであり、普遍的・不変的な「現実」を持たないことを示している。この視点から、同性愛者のアイデンティティも特定の歴史的・社会的文脈の中で形成されるものであり、そのプロセスは複雑で相互に関連し合う力の作用下にあるものと言える。

以上のように、従来の同性愛者のアイデンティティ形成に関する研究では、アイデンティティを一枚岩として捉え、その内部の多様性や個々人の経験を十分に考慮してこなかった。このため、同性愛者のアイデンティティ研究の多くが、同性愛者が固定的なアイデンティティを獲得し、それを肯定的に統合することを理想とした。しかし、これらの研究は、セクシュアル・アイデンティティが歴史的・文化的・社会的に規定され、変

動するものであるという視点を十分に取り入れていない。その結果、同性愛者の典型的なアイデンティティ形成プロセスを特徴づける「一連の段階」が提唱され、それがまるで普遍的なライフコースであるかのように扱われる傾向が見られた。特に 1980 年代後半から、男性同性愛者に関する研究が増加し、その多くは男性同性愛者の人生を「苦悩や被害に満ちた物語」として描く傾向にあった。これらの物語は、男性同性愛者が社会的な困難を乗り越え、最終的に安定した統合的なアイデンティティにたどり着くという、一つの明確なストーリーを強調していった。その結果、同性愛者が多様なアイデンティティを持ち得る可能性が抑えられてしまったと言える。島袋 (2023) が指摘するように、多くの研究は同性愛者が「同性愛者」(研究者によって措定されてきたアイデンティティ理解)として自己を理解する過程のみに着目しており、同性愛者個々人の意識を十分に検討してこなかった。このような状況を打開するためには、ポスト構造主義・クィア理論の視点を取り入れ、アイデンティティの多様性と流動性を認識し、包括的な理解を追求する必要がある。

3. 理論的視座

第 2 節で述べたように、従来の統合仮説における同性愛アイデンティティの理解は、一貫した自己像として確立されることを理想とする規範的枠組みであった。本節では、同性愛者のアイデンティティの新たなあり方を検討するために、参考する理論的視座を紹介する。

まず検討するのは、エリクソンが提唱した「自我アイデンティティ¹ (ego identity)」の概念である。エリクソンによれば、アイデンティティとは、自我が特定の社会的現実の枠組みのなかで定義されている自我へと発達しつつあるという確信の感覚であり、その発達の多くは無意識的なプロセスとして生涯にわたって続くと考えられる (Erikson 1959 = 1973 ; 浜田 2010)。この意味で彼は、青年期において安定したアイデンティティの確立を心理的発達の重要な課題として位置づけ、多様な状況下においても一貫性を維持できる自己の獲得を強調した。この安定したアイデンティティを説明するために、エリクソンは自己アイデンティティ (self identity) を「個人的アイデンティティ (personal identity)」と「社会的アイデンティティ (social identity)」という二つの側面に分け、両者が一致する状態を「アイデンティティの統合」、一致しない状態を「アイデンティティの拡散」と呼んだ。ただしエリクソンの理論において最も重視されるべきは、こうした個人的・社会的同一性を単に受動的に統合するのではなく、社会的同一性に積極的に働きかけつつ、個人的同一性を更新し続ける自我の能動性としての「自我アイデンティティ」である (草津 1978 ; 浜田 2010)。すなわち、自我アイデンティティは、多様な自己像を束ねる自我の統合力とともに、自我を主体的・能動的に問い直し再構成していく動態的なプロセスそのものであり、自己を形成する心理的な核心として位置づけられる。

一方、社会学者のゴフマンはアイデンティティが他者との相互行為を通じて演じられるものであると主張した。彼によれば、アイデンティティは固定されたものではなく、

¹自我アイデンティティ (ego identity) は、G.H. ミードの「I」(主我：自発的、能動的な側面)に近い、能動的に「私とは何者か」を選び取り再帰的に構成していく側面。自己アイデンティティ (self identity) は、G.H. ミードの「Me」(客我：社会的規範や他者からの視線を内在化した「私」)に近い。

状況に応じて加工や偽装が必要とされる (Goffman 1963=1973)。ゴフマンは、アイデンティティを「社会的アイデンティティ」「個人的アイデンティティ」「自我アイデンティティ」の三つに分け、それぞれが相互に影響を与えながら、個人の自己認識と社会的役割を形成するとしている。「社会的アイデンティティ」は、他者が個人に対して付与する社会的役割やラベルを意味する。これは、個人が社会的にどのように見られるかを反映しており、固定的な属性ではない。社会的アイデンティティの下位概念は「対他的な社会的アイデンティティ」と、「即自的な社会的アイデンティティ」がある。前者は、「相手の人にわれわれが付与している性格」であり、後者は「彼が事実もっていることを、求められれば明らかにし得るカテゴリー、属性」である (Goffman 1963=1973)。一方で、「個人的アイデンティティ」は、個人の独自の経験や生活史に基づくものであり、個人が自分を他者と区別するために用いる識別の手掛かりである。さらに、「自我アイデンティティ」は、個人が自己をどのように主観的に捉え、他者との関わりの中で再帰的に自己を再構築し、自己の状況、連続性、特性に関する主観的な認識を指す。

さらに、ジュディス・バトラーは、アイデンティティが「呼びかけ (interpellation)」のプロセスを通じて構築されると主張している。「呼びかけ」とは、主体が特定の言説や権力構造によって社会的な位置を与えられ、主体として成立する過程を指す。この視点に立脚し、彼女はジェンダーやセクシュアリティといったアイデンティティが、政治的権力や社会的規範によって構築されるものであり、それが抑圧的な側面を持つことを示した (Butler 1990=1999)。また、バトラーは「パフォーマティヴィティ (performativity)」という概念を用いて、アイデンティティ形成の過程を論じた。彼女によれば、「アイデンティティは、その結果だと考えられる『表出』によって、まさにパフォーマティヴに構築されるものである (Butler 1990=1999: 58-59)」。つまり、主体は固定的な本質を持つ存在ではなく、言語行為の引用と反復による絶えざる構築過程の中にある。そして、この引用／反復のプロセスは既存のコンテクストからのずれ、すなわち「攪乱」を可能にし (Butler 1997=2004)、新たなアイデンティティの可能性を切り開くものとして機能する。バトラーは、曖昧で非一貫的なアイデンティティの存在を認めることで、既存の社会秩序に対抗する可能性を強調した。彼女の理論は、アイデンティティを固定的なものとして捉える従来の視点を揺さぶり、アイデンティティ形成が言語的・社会的実践の中で常に動的に再構築されるプロセスであることを示している。

バトラーが示した「攪乱」を政治的可能性として捉える一方で、スチュアート・ホールは、少数者が「存在証明」を強迫的に必要とされるのは、支配権力によって少数者としてカテゴリー化されるからであり、少数者とは「少数者化」という言説実践の結果としてしか存在しないと述べている。ホールはバトラーと同様に、アイデンティティを「呼びかけ」のプロセスだと理解し、アイデンティティを以下のように定義している。「私は『アイデンティティ』という言葉、出会う点、縫合の点という意味で使っている。つまり、『呼びかけ』ようとする試み、語りかける試み、特定の言説の社会的主体としてのわれわれを場所に招き入れようとする試みをする言説・実践と、主体性を生産し、『語りかけられる』ことのできる主体としてわれわれを構築するプロセスとの出会う点、『縫合』の点という意味である (Hall 1996: 15)」。この「出会う点、縫合の点」は、個人が社会的な言説や実践を通じて自らのアイデンティティを形成し、社会的な文脈において自らの位置を確認することを示している。

ゴフマン、バトラー、ホールのアイデンティティ論は多元的・構築主義的なアプローチに基づく理論として位置付けられる。この視点は、従来の固定的で統合的なアイデンティティ理論とは異なり、アイデンティティが個人の経験や社会的文脈によって常に再構築され続けるものであることを強調する。こうした視点は、現代のクィア理論においても重要な位置を占めており、特に性的マイノリティの多様な経験を理解する上で大きな示唆を与える。

しかし、これらの理論に対しても批判は存在する。例えば、津田（2020）は、アイデンティティが多様で流動的であるとする理論が、個人が抱える存在論的不安を十分に説明しきれていないと指摘している。存在論的不安とは、個人が自己の存在やアイデンティティについて深い不安や疑念を抱き、存在理由や未来に対する不確実性に直面した際に感じる根本的な不安である。現代社会においてアイデンティティの安定を支えてきた社会構造が揺らぐ中で、個人が自分の存在に確信を持てず、不安定な状況に置かれる。そのため、統合的アイデンティティは依然として個人の存在論的不安を緩和する手段として求められることがある。たとえ状況ごとの多元性に開かれた柔軟なアイデンティティであっても、自分らしさや過去の経験に基づいた統合性が脆弱ながらも保持されていると考えられる（Beck 1986＝1998、伊藤 2005）。加えて、片桐（2017）は、行為者が存在論的不安を解消するために「心・脳・生物学的身体など科学的・自己内在的な言説を参照する自己観」への志向性が高まっていると述べている。これら、近代的な「大きな物語」が弱まり、他者関係が不安定化する中で、心理学的・生物学的な言説が広がり、それを通じて自己を規定しようとする動きが一般化してきた。

この視点から、アイデンティティは固定的なものではなく、社会的・歴史的な文脈の中で形成される動的なプロセスであると同時に、その流動性が存在論的不安を引き起こし得るという両義性を持つことが理解できる。したがって、同性愛者のアイデンティティ研究においては、固定的な統合を求める理論と、流動性と多様性を強調する理論の両方を批判的に検討し、個々の文脈に応じた多様なアイデンティティ形成のあり方を探求する必要がある。

4. 男性同性愛者のアイデンティティ理解についての新たな可能性

4. 1. アフィニティ（親和性）とアイデンティティ

男性同性愛者のアイデンティティを理解する新たな視点の一つとして「アフィニティ（affinity；親和性）」という概念に着目したい。前述したとおり、従来の同性愛アイデンティティ形成理論は、アイデンティティを時間的に持続する安定的な自己像として捉えることが一般的であった。しかし、現代社会のセクシュアリティの多様性と流動性を考えると、こうした固定的なアイデンティティモデルはもはや適切ではない。本項では、「アフィニティ」に着目し、同性愛アイデンティティを再考する。

同性愛者のアイデンティティの形成において、「行為」や「感覚・嗜好性」が重要な役割を果たしていることはいうまでもない。Troiden が同性愛を自分自身と関連のあるものだとは見ていない鋭敏化(sensitization)の段階を、同性愛アイデンティティ形成の第1段階に位置付けたのは、この「アフィニティ」の重要性を認識したからだと言える。Troiden に言わせれば、この段階では、他者に対する感覚や嗜好性が重要であり、同性愛を自分の問題として後々考えるようになる土台となるような社会的経験を積んでいる。また、Guittar（2014）は、アメリカの多くの若者が明確なセクシュアル・アイデンティティを形成する前に、「男の子／女の子が好き」といった言葉、いわば同性に

対する「セクシュアル・アフィニティ」を通じて自らのセクシュアリティを表現する傾向があることを見出した。これは、ヘテロノーマティブな社会で正統でないセクシュアリティを表現するリスクを減らすための戦略と見ることができ、自分のセクシュアリティを表現する際に「アフィニティ」が機能していることを明らかにした。アフィニティは、固定的なアイデンティティの枠組みを超えた自己認識を促進し、個人のセクシュアル・アイデンティティ形成に寄与しているのはいうまでもないが、ここで重要なのは「セクシュアル・アフィニティ」は、セクシュアル・アイデンティティの不可欠な一部として捉えるべきではないかという点である。

エリクソンのアイデンティティ理論も、この視点を支持するものである。前述したように、エリクソンは、自己アイデンティティを個人的同一性と社会的同一性の統合として捉え、個人が社会との関わりの中で自己をどのように認識し、成長させていくかに焦点を当てた。しかし、エリクソンの「自我アイデンティティ」概念を踏まえると、「感覚」や「アフィニティ」はそれにおける不可欠な要素であることがわかる。個人は自分の中にある内的感覚、いわば他者に対するアフィニティや（同性愛アイデンティティ研究で捨象されがちな）性的指向といったものを通じて、自分自身を理解し、社会との関わりの中でアイデンティティを統合していく。浜田（2010）も指摘するように、エリクソンのアイデンティティ理論における「人格的統合」は、単に社会的役割に適応することではなく、「実践」を通じて動態的に自己を統合することを意味している。つまりアイデンティティが「統合」されるとは、「パラダイムの外側にある個人的同一性と社会的同一性のいずれかに迎合して『誰かになる』ことではない。それは『実践』と『縫合』の『過程』という動態のなかで『私になる』ことであり、まとまりのある『私』を他者に伝えられるようになることなのである」。したがって、アフィニティは、アイデンティティの重要な要素であり、これを無視することは自己像を理解する上で不十分である。

また、ゴフマンは、アイデンティティが個人によって社会的相互作用の中でどのように演出され、他者に提示されるかに焦点を当てた。彼のアイデンティティ理論において、「感覚」や「アフィニティ」は「個人的アイデンティティ」の一部として位置付けられる。そして、この個人的アイデンティティの一部である「アフィニティ」を他者にどのように提示するか、また同性愛アイデンティティにどの程度コミットするか、あるいはどのように表現するかは、「自我アイデンティティ」によって判断される。この判断は、個人がさまざまな社会経験を再帰的に理解し、それに基づいて自分の行動や表現方法を決定する過程を通じて行われる。

さらに、バトラーのパフォーマティビティ理論から考えると、アイデンティティとは、反復される行為を通じて継続的に生成される「なる」というプロセスである。したがって、同性愛者が自身のセクシュアリティを表現する際に経験する親和性や感覚は、Troiden が提示したアイデンティティの前段階に位置づけられるような発達の通過点ではなく、むしろアイデンティティ形成過程における構成要素として位置づけられるべきである。言い換えれば、同性に「惹かれた」「惹かれ続ける」「惹かれる自己を演じる」といった反復的な実践の積み重ねによって、「同性愛者」という主体が生成されるのである。もしアイデンティティが必ずしも統合されるべきものではなく、常に経験を通じて形成され続ける過程であるとすれば、そうした感覚や嗜好としての「アフィニティ」こそが、アイデンティティそのものの重要な構成要素であるとすら言えるだろう。ただし、ここで留意すべき点は、本稿における「アフィニティ」の概念は、いわゆる「生得的な性的指向」や、個人の内面に自然に発生する感情・嗜好といった心理的実在として

捉えられるものではないということである。むしろ、ポスト構造主義的パラダイムに立てば、私たちが「内面」と呼ぶものさえも、社会的な関係や言説の網の目の中で形づくられたものであり、「アフィニティ」として感じられる親和性や嗜好も例外ではない。

以上の考察を踏まえると、「アフィニティ」をアイデンティティの一部として再考することは、現代社会における多様な自己認識を包括的に理解するために不可欠である。固定的なカテゴリーに依存せず、個々の感覚に基づいて柔軟に構築されるアイデンティティのあり方は、まさに「感覚」や「アフィニティ」をその中核に据えた新たな自己理解の可能性を示している。

4. 2. アイデンティティの揺らぎとカテゴリーの政治

アイデンティティ概念は、近代的な社会構造における支配的な個人の在り方を支える一方で、抑圧に対抗する言説、いわゆるアイデンティティ・ポリティクスの理論的支柱としても機能してきた（小森 2005）。特にゲイ解放運動においては、「ゲイ」という属性に基づく集合的アイデンティティを構築し、その属性に対する差別を正当化する社会的規範に対抗する手段として重要な役割を果たしてきた。しかし、この運動において、男性同性愛者のコミュニティ内にある種の「理想的なゲイ像」が提示され、その規範に合わない者が疎外されるという問題が指摘されている。

また、中国における男性同性愛者に関する言説は、欧米におけるそれとは異なる特質を持つ。中国の男性同性愛者は欧米に比べて安定した「集団的な」アイデンティティを形成しておらず、制度化されていない、しばしば「原子化」された状態で存在しているとされる（王晴鋒 2011、景軍ほか 2014、魏偉・史俊鵬 2017）。これに関連して、こうした男性同性愛者に関するカテゴリーが中国の男性同性愛者当事者にとって何を意味するのか重要な問いとして浮上する。

このような背景から、アイデンティティの統合的な状態を構築することが望ましいという「統合仮説」について再考が求められる。上野（2005）は、「統合仮説」の問題点を指摘し、多くの人々がアイデンティティの統合を欠いたままでも社会生活を送っていることを示している。さらに、現代社会においては、断片的なアイデンティティの間を横断しつつ生きることがむしろ適合的であると述べ、複数のアイデンティティ間の隔離と共存が実現可能であることを強調した。こうした観点から、上野は「近代的」な背景を持つアイデンティティ概念の限界を指摘し、「脱アイデンティティ」の必要性を提起している。これは、「アイデンティティ強迫」から現代社会を解放する理論的道筋を提供するものとして位置づけられる。ここで特に注目すべきなのは、伊野（2001）がバトラーのエージェンシー概念を引用しながら提唱した「位置」という概念である。

また、伊野（2001）は、「アイデンティティ概念から位置という概念への意識的・戦略的移行、空間論的認識の転換」を理論化し、アイデンティティを持つ主体から「政治的行為者としての位置」に立つことで、行為に焦点を当てる新しい視点を示した。すなわち、伊野は「アイデンティティ・ポリティクス」のオルタナティブとして「カテゴリーの政治」を提唱した。この「カテゴリーの政治」とは、「アイデンティティが第一義的な前提とされない、カテゴリーのパフォーマンス的な実践」を意味し、アイデンティティを固定的・一貫的なものとせず、状況や文脈に応じて柔軟に変化するものとして捉える視点である（伊野 2005）。この視点は、個人は社会的カテゴリーを参照しつつもそれに依存せず、カテゴリーとの距離を調整しながら自己を表現する可能にするものである。さらに、カテゴリーの政治による解放の可能性について、伊野は「カテゴリーを

戦略的に用いることによって、差別の構造を暴露し、カテゴリーのパフォーマティブな引用の中で生じるズレの中に変革の契機を見つけ出していく」と述べた。

このことは、具体的には中国の男性同性愛者が「同志」や「ゲイ」といった言葉を状況に応じて使い分けることが挙げられる(魏 2007、富 2012)。このような自己表現は、特定のカテゴリーに完全には同一化しないプロセスを示している。また、Zhou (2022)は「同志」以外の様々なゲイ用語に着目し、中国の男性同性愛者における3つのラベリング戦略を示している。これらの戦略は、世代、階級、自己受容、感情表現などに基づく内部分裂と階層化を明らかにするものである。たとえば、ある男性同性愛者は他の男性同性愛者から象徴的な境界線を引くため、特定のラベルを用いることで理想的または優れた自我を構築しようとする。具体的には、彼らは「ゲイ」などの用語を用いることで若く中流階級で目に見えるゲイアイデンティティを構築し、一方で、「同性恋」や「基佬」など本来は蔑視的な響きを持つ用語を、あえて自ら用いることによって、差別を恐れず自分のセクシュアリティを肯定的に受け入れているという姿勢を示し、誇り高い男性同性愛者としての自己イメージを強調する²。また、「基友」や「彩虹(レインボー)」などの用語を使用することで、セクシュアル・アイデンティティの曖昧さや主流性を表現する戦略も存在する。こうしたラベリング実践は、男性同性愛者のコミュニティ内部でのアイデンティティ形成の複雑さを反映している。これにより、個人が特定のカテゴリーに固定されず、それを操作しながら自己を表現する柔軟な方法が強調される。

もちろん、これらの研究は中国の男性同性愛者のアイデンティティ形成において、「統合仮説」が適用しにくいことを示唆している。しかし、アイデンティティを完全に放棄することが望ましいかについては、なお議論が続いている。浜田(2010)は上野が「脱」しようとするのは本質主義的なアイデンティティであり、アイデンティティを「失効」とすることを批判し、ホールの「出会う点、縫合の点」としてのアイデンティティの有用性を検討している。また、伊野の「カテゴリーの政治」概念はゴフマンの「アイデンティティペグ」やホールの「出会う点、縫合の点」と共鳴する部分がある。例えば、ゴフマンは個人的アイデンティティについて説明する際に、以下のように述べる。「個人的アイデンティティという言葉で私は最初の二つ表象だけ、すなわち『決定的な標識』あるいは『アイデンティティ・ペグ』およびアイデンティティ・ペグの助けをかりて個人に帰せられるにいたる生活史上のかけがえのない組み合わせを考えている。特定個人が他のすべての人びとから区別され、さらに、この区別の手がかりの周辺に、社会的事実についての一連の連続的な記録が帰せられ、綿菓子のようにからまって、ついには粘着力のあるものになり、それに、まだ伝記的事実が附着することがある(Goffman 1963=1973: 95)」という。

アイデンティティという概念の有用性についての論争は未だ続いているが、本質主義的な統合すべき同性愛アイデンティティという想定は否定され、多元的で流動的なアイデンティティ理解を通じて、現代における性的マイノリティの経験をより適切に捉えることが求められている。

² 本来差別語として機能してきた呼称を当事者があえて自称として用い、その否定的含意を反転させる現象は、英語圏の「queer」の再領有に典型的にみられる。「queer」は本来「奇妙な」を意味し、20世紀には「変態」に相当する蔑称として用いられてきた。しかし、アメリカでは1980年代末ごろから、性的マイノリティがこの言葉を自らに対して肯定的に使い始めた。

4. 3. 統合の再考と再帰的アイデンティティの可能性

だが、統合的アイデンティティや一貫性のある自己は、すでに通用しない理論として全面的に棄却されるべきなのだろうか。津田（2020）、片桐（2017）の議論から示唆されるように、現代社会において、社会構造の揺らぎは人々に深刻な影響を与え、多くの人々が存在論的不安に直面する状況を生み出している。このような不安に対処するためにアイデンティティの統合を求める志向性が再び重要視されるようになっていく。統合的アイデンティティは、こうした存在論的不安を緩和する手段として機能しており、行為者は心理学・生物学的な知見に基づいて自己を定義しようとする傾向を持つ。

第2節で示したように、今日の同性愛アイデンティティ研究において、Cass・Troidenの統合仮説的なモデルは依然として幅広く使われている。同様な傾向は男性同性愛者においても顕著であることを示していると言える。彼たちもまた、生物学・心理学的知見を参照して自己を理解しようとし、これを通じて自らの存在を正当化する。

ポスト構造主義の視点からすると、セクシュアル・アイデンティティは、固定的な到達点ではなく、社会的実践を通して形成される。統合的なセクシュアル・アイデンティティの追求は、ホールが「出会う点、縫合の点」と称したように、彼らと社会との間の一時的な交渉の結果であり、社会変化に応じて絶えず再交渉されるものである。このように考えれば、統合的アイデンティティの追求は、男性同性愛者が自己の存在の正当性に対する確信を得るための手段として再評価されるものと考えられる。中国の若年男性同性愛者を例に取れば、政治的検閲や社会的制約により、統一的で公式に認められたカテゴリーに依存することは困難である。そのため、彼らは、新しいカテゴリーを絶えず創造し、それを活用して自己を表現している。このカテゴリーの絶え間ない再創造と使用が、セクシュアル・アイデンティティを形成する上で重要な役割を果たしている。たとえば、中国では2000年代には「ゲイ」や「同志」の登場により、それ以前に使われていた「飄飄」は成都のゲイ・コミュニティ内での人気を失い（魏 2007）、さらに2020年代には「同志」という言葉が古いイメージを持つと考えられるようになった（Zhou 2022）。2024年現在、「同性恋」という中国の漢字のピンインの頭文字と一致する「通讯录」という言葉が新しいカテゴリーとしてインターネット上で最も使われている。

これらの変遷は、男性同性愛者が新しいカテゴリーを創造し、自己表現のためにそれを積極的に用いることで、統合されたアイデンティティを追求しているかのように見えるが、実際にはこれらのアイデンティティは再帰的で流動的である。一時的に統合される「縫合の点」としてのアイデンティティは、再帰性を持ち、社会構造の揺らぎや存在論的不安に対処するための戦略として機能している。このように、男性同性愛者のアイデンティティ形成は、社会的カテゴリーと個人のアイデンティティとの間で絶えず相互作用し、動的に再構築されているのである。

5. まとめ

本研究では、アイデンティティ理論を整理した上で、同性愛者のアイデンティティに関する既存の理論を検討し、それらの理論が現代社会や異なる文化的文脈においてどのように適用されるかを分析した。特に、中国の男性同性愛者を対象に、彼らがどのようにアイデンティティを形成し、自己を表現しているかに焦点を当てた。

第4節では、「男性同性愛者のアイデンティティ形成に関する新たな可能性」をテーマとして取り上げた。まず、「アフィニティ」がセクシュアル・アイデンティティの一部として捉える可能性と必要性について論じた。また、同性愛アイデンティティ形成に

おける従来の「統合仮説」の限界に対し、多元的で構築主義的なアプローチの必要性が述べられている。つまり、統合された安定的なアイデンティティを前提とするのではなく、アイデンティティは状況や文脈に応じて柔軟に変化するものとして捉え、個人は社会的カテゴリーを参照しつつもそれに依存せず、カテゴリーとの距離を調整しながら自己を表現する可能にするのである。最後に、男性同性愛者のアイデンティティ形成における「統合仮説」の有効性に再考の余地があること、そして固定的で普遍的なアイデンティティの枠組みを超えて、再帰的なアイデンティティのあり方を理解する必要性について論じた。社会構造の揺らぎに伴って生じる存在論的不安に対処するために、個人のアイデンティティへの統合を求める志向、および再帰的なアイデンティティのあり方について述べた。

有馬・園田 (2010) は「同性愛という性的指向と同性愛であることに起因して生じる感情や同性愛であるために取る行動」に焦点を当てて研究を行う必要があると述べている。また、島袋 (2022b) も、今までの同性愛者のアイデンティティ研究は当事者個々人の経験を見落としていると指摘し、シュッツの社会学理論を基盤に、同性愛者個々人の主観的な意味世界に焦点を当てた現象学的アプローチが有効と提唱した。本研究も、当事者の声を中心に据え、彼らがどのように自己を理解し、他者と関わり合いながらアイデンティティを形成しているのかをより深く探求することの重要性を強調するものである。

参考文献

- 有馬将太・園田直子 (2010) 「同性愛者のセクシュアリティ」 『久留米大学心理学研究』 9: 89-97.
- 白璐・徐震雷・湯海明 (2013) 「社会性別規範与男同性恋者性身份認同」 『中国性科学』 (03), 78-83.
- Beck, U. (1986). *Risikogesellschaft: Auf dem Weg in eine andere Moderne*. Frankfurt am Main: Suhrkamp. (=1998, 東廉・伊藤美登里 訳 『危険社会—新しい近代への道』 法政大学出版局)
- Butler, J. (1990). *Gender Trouble: Feminism and the Subversion of Identity*. New York, NY: Routledge. (=2018, 竹村和子 訳 『ジェンダー・トラブル—フェミニズムとアイデンティティの攪乱』 青土社)
- Butler, J. (1997). *Excitable Speech: A Politics of the Performative*, New York and London: Routledge. (=2004, 竹村和子 訳 『触発する言葉——言語・権力・行為体』 岩波書店)
- Cass, V. C. (1979). Homosexual identity formation: A theoretical model. *Journal of Homosexuality*, 4(3), 219-235.
- Cass, V. C. (1984). Homosexual identity formation: Testing a theoretical model. *Journal of Sex Research*, 20(2), 143-167.
- Duggan, L. (2002). The New Homonormativity: The Sexual Politics of Neoliberalism. In R. Castronovo & D. D. Nelson (Eds.), *Materializing Democracy: Toward a Revitalized Cultural Politics* (pp. 175-194). Durham, North Carolina: Duke University Press.

- Erikson, E. H. (1959). *Identity and the life cycle*. New York, NY: International Universities Press. (=1973, 小此木啓吾 訳 『自我同一性』 誠信書房)
- Foucault, M. (1976). *Histoire de la sexualité I: La volonté de savoir*. Paris: Gallimard. (=渡辺守章 訳 『性の歴史1: 知への意志』 新潮社)
- 藤田由美子 (2015). 『子どものジェンダー構築』. ハーベスト社.
- 富曉星 (2012) 『空間、文化、表演: 東北A市男同性恋群体の人類学観察』 光明日報出版社
- Goffman, E. (1963). *Stigma: Notes on the Management of Spoiled Identity*. Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall. (=1973, 石黒毅 訳 『スティグマの社会学』 かぜり書房)
- Guittar, N. A. (2014). At first I just said ‘I like girls’: Coming out with an affinity, not an identity. *Journal of LGBT Youth*, 11(4), 388-407.
- Hall, S. (1996). Who Needs ‘Identity’? In S. Hall & P. du Gay (Eds.), *Questions of Cultural Identity: Who Needs ‘Identity’?* (pp. 1-17). London: Sage. (=2001, 宇波彰 訳 「誰がアイデンティティを必要とするのか?」 大村書店)
- 浜田雄介 (2010) 「『脱アイデンティティ』論再考」『広島国際研究』16: 67-79.
- 堀田香織(1998)「男子大学生の同性愛アイデンティティ形成」『学生相談研究』19(1): 13-21.
- 伊野真一 (2005)「脱アイデンティティの政治」上野千鶴子編『脱アイデンティティ』, 43-76. 勁草書房.
- 伊野真一(2001)「構築されるセクシュアリティ」上野千鶴子編『構築主義とは何か』: 189-212. 勁草書房
- 石丸径一郎 (2003)「レズビアン、ゲイ、バイセクシャルについて」『心身医学』44(8), 590-594.
- 石丸径一郎 (2005)「性的マイノリティにおける受容体験と自尊心」『コミュニティ心理学研究』, 9(1), 14-24.
- 伊藤美登里(2005)「ドイツにおける自己の『語り』の変遷」『人間科学研究』7: 1-11.
- 蒋思毅・偉志龍 (2022)「自我認同与心理健康」『中国性科学』11: 146-150.
- 景軍・王晨阳・張玉萍(2014)「同性戀の出柜与家本位的糾結」『青年研究』5: 79-96.
- 葛西真記子 (2014)「児童期・思春期のセクシュアル・マイノリティを支えるスクールカウンセリング」張間克己・平田俊明(編)『セクシュアル・マイノリティへの心理的支援同性愛, 性同一性障害を理解する』, 123-139. 岩崎学術出版社.
- 片桐雅隆(2017)『不安定な自己の社会学.』ミネルヴァ書房.
- 小森陽一 (2005)「母語幻想とアイデンティティ」上野千鶴子編『脱アイデンティティ』, 241-265. 勁草書房.
- 草津攻 (1978)「アイデンティティの社会学」『思想』653: 108-142
- 李炳南・繆妍婷・单煜馨 (2021)「男同性戀身份認同与生存狀態的質化研究」『心理月刊』12: 193-194.
- 李放・王一博・邢錦涛・鄭雪 (2018)「年輕男同性戀者自我概念清晰性与生命意義感的关系及作用机制」『心理科学』05: 1178-1184.
- 宮腰辰男 (2012)「セクシュアルマイノリティを生きるということ: 同性愛者がセクシュアリティを受け入れるプロセス」『大正大学カウンセリング研究所紀要』35: 63-77.

- 宮腰辰男 (2013)「セクシュアルマイノリティを生きるということ：カミングアウトとコミュニティをめぐる危機と回復について」『大正大学カウンセリング研究所紀要』36：39-52.
- 元山琴菜 (2020)「差別解消に向けたアイデンティティの構築」『日本の科学者』55(6)：330-335.
- 中西祐子・堀健志 (1997)「「ジェンダーと教育」研究の動向と課題」『教育社会学研究』61：77-100.
- 島袋海理 (2022a)「若年同性愛者のセクシュアル・アイデンティティ形成過程：学校における生徒との相互行為に着目して」『教育学研究』89(4)：629-641.
- 島袋海理 (2022b)「同性愛者のアイデンティティ研究における現象学的アプローチの可能性」,『現象学と社会科学』5：91-105
- 島袋海理 (2023)「同性愛者のアイデンティティはどのように検討されてきたのか」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要. 教育科学』70(1)：27-39
- Troiden, R. (1989). The formation of homosexual identities. *Journal of Homosexuality*, 17(1-2), 43-73.
- 津田翔太郎 (2020)「アイデンティティ理論の再構築」神戸大学大学院人文学研究科博士論文
- 上野千鶴子 (2005)「脱アイデンティティの理論」上野千鶴子編『脱アイデンティティ』：1-41. 勁草書房.
- 王晴鋒 (2011)「生存現状、話語演変和異質的声音—90年代以来的同性恋研究」『青年研究』(05)：83-93+96.
- 王中杰・馮成亮・耿耀国 (2012)「男同性恋大学生性身份認同的定性研究」『中国心理衛生雜誌』08：620-625.
- 魏偉 (2007)「城里的“飄飄”：成都本地同性恋身份的形成和變遷」『社会』27(1)：67-97.
- 魏偉・史俊鵬 (2017)「同性恋話語与中国城市青年异性恋男性特質建构」『青年研究』4：66-77.
- Zhou, Z. B. (2022). Besides tongzhi: Tactics for constructing and communicating sexual identities in China. *Journal of Linguistic Anthropology*, 32(2), 282-300.